

井戸端だより

第73号

発行日：2011年3月31日

発行：くらしの学習会

まじ

1月・2月・3月例会報告	1
くらしの学習会 会計報告	2
蝶のくる庭 ミニパネル展	2
自分の今後を考えた	4
東北関東大震災に思う	5
命	7
みかん農家の苦勞	9
九州の美術館へ	11
自然の厳しさと共生	15
雑感	16
愛媛新聞掲載 ～CO2削減益で食育推進 お知らせ	19

2011.3.11 忘れられない日となった
一瞬にして東北地方の人々の日常が激変した
東日本大震災 福島原発の事故が追い打ちをかけた
65年前に受けた世界で唯一の被爆国である日本
また こんな形で放射能汚染の苦惱が始まった
夫はかつてコンクリートで固められたスリーマイル島を見学したという
私もかつて原水爆禁止運動に参加した
日々繰り返し流されるテレビの映像と情報
拡大していく被害のニュースに陥ってしまう「共感疲労」
いま、自分に何が出来るのか
生活のレベルを1割落とそうという人もいる
まずは落ち着いてと自分に言い聞かす
(SK)

1月・2月・3月例会報告

「蝶の来る庭+自然再生」のテーマでの『パネル展』2011年3/11～3/31
中央公民館ロビーでの実施に向け、例会はパネル作成に集中しました。

1月例会…総会で会計報告・名簿確認を行い、メインパネル・写真を中心
のパネルを具体的にまとめ、一品持ち寄りの昼食を取りながら
今後の活動について話し合いました。

2月例会…カラーとりのこ用紙に写真パネルを組み立て、コメント・説明
文を皆で考えながらメインパネルの完成に向けて頑張ったので
すが、2/10Kさん宅で都合の付くメンバーで継続作業する事
になりました。あるメンバーの提案で、パネルをラミネート加工
することになりKさんが専門業者に加工依頼をしてくれました。
リーダーは広報への掲載文の作成、綾支部長にはお知らせチラ
シを依頼（写真満載の素敵なカラーチラシ8パターン？を作っ
てくれ、お知らせ活動に大活躍）『パネル展』題字は、Dさん
に依頼。メンバー総動員での活動となりました。

2/10 コメント・説明文をKさんが活字にしてくれていてラミネート
も出来上がっていたので、メインパネルはほぼ完成形にはなっ
たのですが物足りなさを感じ、リーダーにも参加してもらって
意見をもらうことになりました。

2/21 パネル展会場中央公民館ロビーに集合、手直し部分の修正を行
い、展示方法も現地で具体的に形作ることができ、2時間かか
りましたが、完成させることができました。

3月例会…9時から『パネル展』会場作り実施。6名参加、無事開催時間
に形作ることができました。Dさんの筆書きでの題字で会場が
引き締まり、メンバー持参の季節の花々が優しさを添えてくれ
「蝶の来る庭・自然再生」パネル展の完成にたどり着けました。

(A. M)

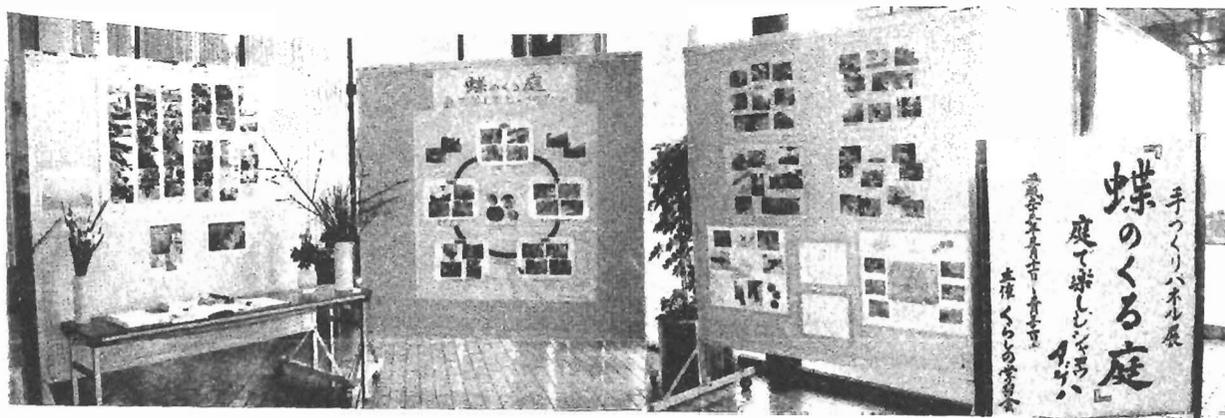
くらしの学習会会計報告 (2010年1月～12月)

収入の部		支出の部	
会費	39,000	切手代	11,760
カンパ	7,200	用紙代	3,134
利子	17	コピー代	20
前年度繰越金	106,383	パネル展準備	6,156
		高速道路料金往復代	2,200
		ガソリン代	5,200
収入合計	152,600	支出合計	28,470

152,600—28,470=124,130 (次年度繰越金)

蝶のくる庭 ミニパネル展

～庭で楽しむジャコウアゲハ～



3月11日から31日まで東温市中央公民館で「蝶のくる庭～庭で楽しむジャコウアゲハ～」のミニパネル展を開催した。

昨年の春から秋にかけて我が家の庭にくる蝶、特に思い入れのあるジャコウアゲハをデジカメで撮影していた。

会員のKさん(ワークブック『蝶のくる庭』を自然を学ぶきっかけにと10年前に編集した)の力を得て5年前から食草ウマノズクサを育て、大きく育った3年前から幼虫をもらっていた。今年はいくつも羽化し、よく飛びまわるようになっていた。ジャコウアゲハは目の高さ程の所をヒラヒラと優雅に飛び、またカメラを向けてもすぐには逃げない結構な被写体だった。細いラップ状のノウゼンカズラに頭を突っ込み翅をバタバタさせながらの食事風景、また、小さい花びらの集まりの

ランタナでは、一つ一つの花びらから一瞬のうちに蜜を吸う早業、また、食草のウマノスズクサにオレンジ色の卵を産みつける時の何度も場所を変えながら安全な場所を探しているその一生懸命な姿、その時々を正面から横から後ろから裏側から興味深々で撮り続けた。そんな写真が 500 枚位になった。

Kさんが「パネル展にしたら面白いね」と提案。その気になりDVDを5部作成し会員に写真を見て貰うことから始まった。写真全部を焼き付けその中から適切な写真を選んでいった。

9月の例会が第1回の打合せ会、月に一度の例会ではなかなか進まず9/8・10/9・11/10・12/2・12/21・1/5・2/3・2/10・2/21と話し合いを重ね徐々にイメージを形にしていった。「ジャコウアゲハの一生」をメインにし、これを1枚のパネルに。「ウマノスズクサ」「庭に来る蝶」「庭の仲間たち」「花と蝶」とテーマごとに4枚のパネルに纏め、以前くらしの学習会が作った絵ハガキ「三ヶ村泉」「自然再生 ジャコウアゲハと共に」も準備し2枚目のパネルに、3枚目は羽化する様子や幼虫が蛹になる場所を探してウロウロしているなど、動きのある様子など、どんな構成にすれば、皆さんに興味を持ってもらえ、分かってもらえるかと思案しながらの作業だった。

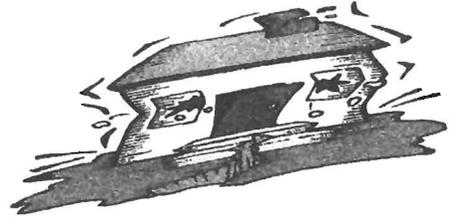
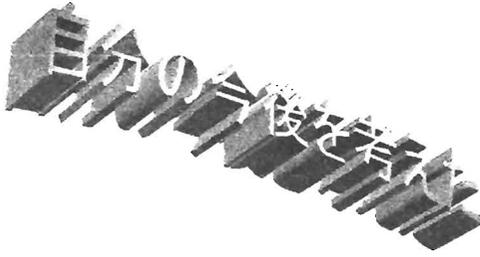
3月展示に向けて、広報とうおんに載せて貰おう！チラシを作ろう！はがきを出そう！会場内の案内板でも宣伝を！展示期間中の当番表も作成！とそれぞれの役割を決めて行った。その間会員の県外転出や会員の配偶者の死も遭った。形にする実務の難しさをも感じながら全員でなんとかパネル展開催にこぎつけた。そして3/11日パネル展が始まった。さて～～～皆さんの反応は・・・

3/29 現在、ノートには多くの方の記帳があった。

丁寧な感想文もあり、そのうちの2点を抜粋します。

★蝶が羽を開いた時閉じた時の美しさ、そのたびに感動します。「その蝶がどのようにして生まれ“生”をつないでいるのか」にはあまり気にすることはありませんでした。この度は素晴らしい蝶の産としての自然界での役割を考えさせられました。

★蝶の飼育については子どもの頃からの経験がありますが、その成虫・羽化までの歩留まりは悪いものです。しかも月並みなモンシロチョウすら判明していないことが多く、なぜを解明する楽しさがあるといえます。特に本邦産の大型アゲハや中型のタテハチョウ類、更にシジミチョウ類の小型種の生活形には特異なものも多く興味の尽きないもの。また、羽化する時の感動は何ものにも替え難いものがあります。このような中でこれだけ写体を捉えたことに敬意を払います。絵ハガキのジャコウアゲハ良いですね。



3月11日は午前中から出かけていたので、地震と津波の事を知ったのは夕方帰宅後のことでした。日ごろから、何事もあまり大げさに話さない夫ですが、その話し方に大変なんだなあと思いました。その後の報道で、事の大きさへの実感は増すばかりでした。

金曜日の夜から月曜日の朝まで、人の無力さに、そして自分の無力さに力が抜ける一方でした。月曜日からは、又、関わっている事を出かけると、そこでは、決められた行事が続いていて、災害にあわれた方の無事を願いながらも通常の生活に戻る自分がいました。そして、帰宅後は、やはり、報道を見る生活が続きました。

人の暮らしは単純なのですが、快適な暮らしが当たり前になっていた私達には、電気がない、ガソリンがない生活は信じられません。まして、食べるものがない生活がこの日本で現実に起きることなのかと、被災された方々は実にお気の毒だと感じます。被災地の方々の事を考えると、この地で暮らせる幸せを感じないではいられません。

日本は地震の国だと以前から言われています。ここ20年でも、阪神、新潟等の大きな地震から小さいものまで、数多くの地震を見聞きしています。終戦後の南海地震から60年以上が過ぎました。前触れの知らせはなさそうですが、おそらく、そろそろ、地殻変動の周期がくるとの予想を重く受け止めないといけないんだと自分や家族にも心づもりができました。多くの亡くなられた方々のお気持ちや、残されたご家族の方々のお気持ちを思うと、私には、自分のために、家族のために使える時間がある幸せを心から感謝しなければとの気持ちが湧きあがります。

私には、ここ数年、外国の方と接する機会があります。帰国された方から、今回の地震は大丈夫ですかというメールを頂きました。日本は長い国ですから、愛媛は全く今回の地震は関係ないと返事をしました。日本中に被害が出ているという報道に心配していたそうです。地震の事をテレビで見たのは、ヨーロッパだったそうですが、飛行場で読んだ新聞記事の内容も日本の地震の事ばかりだったようです。彼女の気づかいに感謝したいと思いました。

そして、これから、現実に向き合わなければならない被災された方々の大変さに胸が痛みますが、強く、前向きにと願います。

日本政府の援助が隔々にまで届きますようにと、心のケアがされますようにと願います。そして、私に何ができるんだろうと考えています。 (M・T)

東北関東大震災に思う

2011年3月11日(金)朝9時、私たちの会くらしの学習会の手作りパネル展『蝶のくる庭』を開催するための準備で、会員5名が中央公民館に集まりました。手際良く展示物を所定の位置に貼りつけ、そして、パネル展の初日を迎えました。

私は、その日の午後愛媛県国際交流センターへ行きました。恒例の在住外国人対象の春季日本語集中講座2日目の授業の担当だったからです。2時間の授業が終わった午後3時半、受講生の一人アイルランド人のSさんが、「先生、東京の方ですごく大きい地震があったそうです。マグニチュード8ぐらい？国の友達からメールが入っていました。」と教えてくれました。「えっ。東京でそんな大きな地震が。それは大変なことですね……。」

大急ぎで授業後の片づけをして、帰宅途中のカーラジオで、東北から関東地方に亘り、大変な地震が起きて、津波の被害も起きているということを知りました。家に着くなり、テレビのスイッチを入れました。午後2時46分ごろに始めの地震が、そのあとも大きな地震が続いたということで、大地震の被害はもちろんのこと、そのあとの津波、場所によっては10mの大津波による惨状を伝えていました。マグニチュードも次々と修正されて、最終的には9というとんでもない大地震だということがわかりました。

実は、この日の夜行バスで実家のある名古屋へ帰ることになっていました。九州の友達からは、「名古屋に帰るの大丈夫？」というメールが届いていました。心配で市駅まで少し早めに出かけましたが、高速バス運休などという張り紙もありませんでした。時間通りバスが来たので、乗り込みました。夜10時半何事もなくバスは出発しました。

ほとんど眠れないまま、翌朝6時ごろ名古屋に無事着きました。その日は、今年大学院を修了して就職が決まった妹の娘と3月誕生日を迎える弟の娘とうちの息子のお祝いを兼ねて実家の両親が出られる者大集合！をかけ、11時半からお祝いの会をすることになっていました。私は、普通なら出られないところですが、大学の授業がないこの時期だからこそ、周りの方に少し甘えて敢えて参加することにしました。夫は仕事でももちろん出られませんでしたし、千葉にいる上の息子も出られませんでした。家族の大多数10名が集うことができました。

夫の母が4年前に亡くなり、その1年後に父が亡くなり、もっと色々な話が聞きたかった、もっと努力して顔を見せに行けばよかったと後悔していたので、息子たちが社会人になってからはできるだけ、一人だけでも折を見て帰るようにしています。

今回の集まりは、この非常事態の中、被災して大変な思いをしている方々を思うと申し訳ないと思う一方、こんな集まりが持てる幸せをつくづくかみしめる機会と

なりました。

あとは、千葉に住んでいる長男が心配で、何度も携帯で連絡をとっていたのですが、なかなか繋がらず、その次の夜、やっとながつながってほっとしました。息子の方も何度も電話をくれていたのに、繋がらなかったそうです。通話制限にも引掛かっていたようです。被害はというと、会社の研究室の実験装置が壊れ、データがダメになった程度で、大事には至らなかったということでした。

地震、津波は壊滅的な被害をもたらしましたが、それでも徐々には回復しつつあると言えます。しかし、福島第一原発のダメージの方が大きな問題を引き起こしています。目に見えない放射能は辺り一面飛び散っています。土壌、水、海にも流れ込み、日本列島の汚染地域は徐々に広がりつつあります。

原発の問題は、天災というより人災という感じがしてなりません。原子力発電を進めんがため、安全神話を作りだし、次々に原発を増やしていった日本の政策はどうだったのでしょうか。地震多発国日本にとって、原発は非常に恐ろしい設備だということを思い知らされた感じです。罪もない子供たちが放射能の影響で今後何らかの不調を訴えるようなことになったら・・・私たち大人たちの責任です。一刻も早く、封じ込めてしまわなければ・・・。そのための方法はないのでしょうか。命をかけて現場で働いてくださる方々に感謝しつつも、非常に杜撰な今の現場の対応（誰が考えても、汚染された水が入る可能性がある場所にあのような装備で入るでしょうか）に腹が立ちます。今日の新聞によると、東電が異常に高い放射線量を事前に確認しながら作業員に注意を喚起しなかったというのですから、開いた口がふさがりません。早く、できるだけ安全に・・・両立は難しいとは思いますが、でも、しなければなりません。

世界中が日本の対応を見守っています。今こそ、日本人の底力を見てもらいましょう。皆が同じ目標に向かって力を合わせて頑張れば、きっと強く魅力的な日本になるでしょう。

14日夜、名古屋から戻りました。メールを開けたら、世界中の教え子、友達からメールがどっさり入っていました。「心配で寝られません。」「先生、大丈夫ですか。」「何かできることを言ってください。」「今後の復興をお祈りしています。」「・・・その1つずつにお礼を書きながら、日本は日本だけで存在するのではない。世界の様々な国、人と関わり合って存在しているのだということを強く感じました。

今回の災害の影響で、帰国を余儀なくされた外国人、4月から留学することになっていたのにやめた学生が愛媛の私の知っている範囲にも存在します。デマは、問題外としても、日本が世界で一番どんな災害にも強い安全な魅力的な国になることを願ってやみません。そのために、私たち一人一人が何をしたらいいのか考えたいと思います。

(T・H)

命

平成 22 年 12 月 10 日、私の命ある限り忘れることが出来ない日となった。22 歳から 76 歳迄苦しい時もあったが、54 年も共に生活した夫が、一瞬に命という光を消したからだ。

12 年前、透析というかごの中に 2 人が入り、時間の制約、食事制限、病院通いの毎日となった。週一回の外出が唯一の楽しみでトンカツやそばを美味しく食べる姿が忘れられない。

5 年目位迄は電車や息子の車で美術館にも出かけ、孫の押す車椅子を喜んだ時もあった。3 年前に愛大病院で、大腸癌と膀胱癌の手術をし 3 カ月入院してからは、足腰が弱り気力も衰え新聞も読まなくなった。医師にも廃人症候と言われ、気分にもむらがあり調子の悪い時は、看護師が冷たいとか医師が体の様子を理解してくれないとか、その末おまえも優しくないと詰じられる事も多くなった。私も黙っていないので暖かいはずの家に、いやな空気が流れるようになった。

思い返すと教員になり新採で赴任した学校が同じという縁で、親に反対されながらも、歴史に美術に政治、何を聞いても教えてくれる夫を尊敬し結婚した。山の中の小さな家で、洗濯機も炊飯器もない時代、それでも、何とか 2 人の子を育て、やっと楽になった昭和 43 年、姑が半身不随となり、夫が「看

てやってくれ」と頼めば、心よく引き受け共働きでの年寄りの世話は大変だった。

姑が 90 歳になり足が弱ったので、早めに 2 人で退職し、夫は町議会に私は婦人会にと、2 人で話し合い協力し合って何の不足もなく過し、96 歳の姑を取ってからは、旅行にも行ったり孫の子守りをしたりと楽しい日々を送ったのも束の間、夫の体の調子が悪く痩せがひどくなったので町議も 2 期で終わり重信クリニックにお世話になることになった。

2 人の退職金をすべて出し、新しい家を建て病人が心地よく暮らせる様に環境を整えた。

この当たりから夫は「私が先に死ぬのだから」と世帯主も貯金も土地もすべて私の名にしてくれた。それでも指示は夫で素直に「ハイハイ」と従っていたが、以前住んでいた久万にある家を他人に貸す貸さない、で意見が対立してから、私の方が指示する様になり、夫にとっては亭主関白の座を引き渡すことになった。

管理栄養士の様な注意をすると「食わずにおって死のか」とか「私が死んだらあんたが楽になるが」とか言って私を困らせた。

昨年夏ごろから心臓の弁が狭くなっている所以手術をと言われたが、夫

は「それで死ぬのだったら楽でええ」と医師の意見を聞こうとしなかったが、何回も言われるので家族会議をひらいて背中を押してから一日でも長生きをが逆に命を縮める事になった。一日の入院で何人もの医師が、それぞれに良いと思う処置をしたのが、夫にとっては耐えられず、ショック死というか突然の死の様な死となった。

医師もさがり病室に 2 人だけになった時、まだ暖かい頬に、私の頬を寄せ「ごめん」を言い続け涙を流した。

葬儀迄は人の出入りも多く、息子が仕切りながらもいろいろ相談もあり泣く間もなかったが、2 カ月を過ぎた今も、一人になると遺影を見ては涙し、友人から電話をもらっては泣き、慰めの手紙をもらってはむせび、泉の様に出て来る涙はどうする事も出来ない。

友人は、12 年も介護したのだからとか、54 年も一緒に暮らしたのだからと慰めてくれるが、私は 54 の年月には、職場での悩み、子育て、姑の病など、その時々乗り越えた思い出を話す人がいないことが辛い。今はにこっと笑っている遺影に、「この時は初孫のお宮参りで嬉しかったのよね」と話し掛けている。

透析というかごから抜け出し天に昇った夫は、トンカツでお酒でも飲んでいるだろう。私はこれから一人で生き

ていくことになるが、困った時には助けてねと祈っている。クリスマスにノンアルコールのビールを半分ずつ飲もうと買った小さな缶ビールが冷蔵庫で残念そうに私を見ている。

突然死がありうると分かってからは、夫は「私の人生も、まあまあだった」とか「もう終りが近い」とか言う言葉も、私は信じず「まだまだ弱って寝たきりになってからよ」と話していたので、突然の死に戸惑うことばかりで聞いておけばよかったと思う事ばかりである。

支え支えられた 54 年だったが、几帳面で真っ直ぐな性格の夫と、出しゃばりでおしゃべりの 2 人の人生は、我慢の連続だったかもしれないが、幸せだったと感謝しよう。

1/29 (Sa・k)



みかん農家の苦勞

2009年9月、みかんと太陽とライアスロンの島・中島を訪ねた時、お世話になったみかん農家のk・yさんに今年も東京へみかんを送って貰おうとメールを送った。

k・yさんと3度にわたりメールのやりとりをした。

今年のみかんは、トリプルパンチで苦勞しております。

先ず、イノシシ。

島全体で罾をかけて駆除していますが、少々では間に合わず、被害は甚大です。農家は大きな金網、電気柵、漁業用の網で大事な畑を囲ってみかんを守ろうと頑張っていますが、それも経費のかかることなので全てというわけにはいきません。

そしてヒヨドリ。

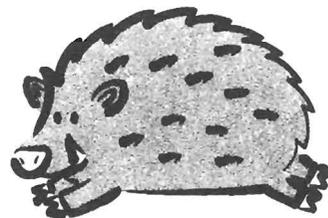
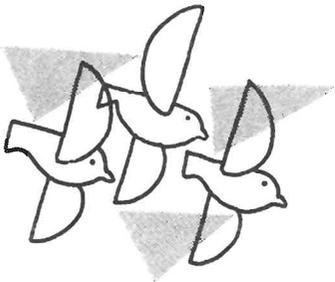
1年おきにヒヨドリの多い年と少ない年がありますが、今年が多い年。夏の異常高温、渇水で山の食べ物が無いのでしょうか、群れでやってきて美味しい実からつつきます。ちょっとでもくちばしの傷が付くと腐敗につながるので困ります。美味しいみかんがわかるんです。初め、ヒヨドリやカラスがつついて、半分ぐらい食べたあと、メジロなどの小さな鳥が皮だけになるまで食べています。

最後は低温障害。

寒風が走るところでは、果皮が柔らかくなって黒くなります。1度凍ったみかんはゴムのようになっています。氷が張るような低温でも日中が暖かければ大きな被害は出ませんが今年の寒さは特別で瀬戸内の温暖な島とは言えません。

このような状況の中で、たくましく育ったみかんを大切に販売しています。平成23年産のみかんはいい物ができるようにと思いながらこれからまた頑張ろうと思っています。

(2/10)



今日はヒヨドリがキャベツやブロッコリーを食べているのを発見！
隣の、3cmくらい芽が出たチンゲン菜も・・・
こんなことは初めてです。
そんなに食べるものがないのでしょうか！！
早速キラキラ光るテープを張ってみました。効き目があればいいのですが。

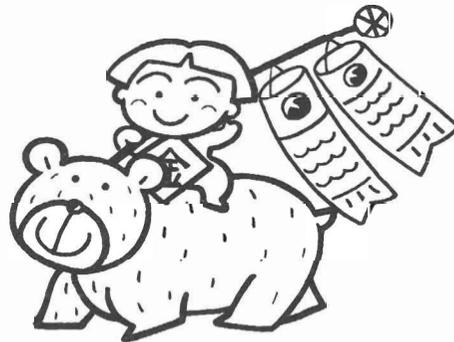
松山にいる4歳の孫が、野菜大好きで、中島ばあちゃんの作った野菜を離乳食の頃から食べています。
帰った時、タイミングが合えば、種まきも一緒にしたり、畑に野菜を採りに行ったりしているので 何とか
守らなくては（笑）
明日は冷え込むとか。
これからのみかんが凍らないようにと願うばかりです。 (2/14)

地震で大変なことになり、自分に何ができるかと、毎日考える中、
我が家に16日、内孫が生まれました。元気な男の子です。
かけがえのない「命」を、大切に育てていきたいと思います。 (3/19)

結局、息子の家族と私共も農家の人達の苦勞の賜、伊予かんを美味しく頂いた。

ヒヨドリと言えば、我が家も畑の白菜の新芽を まるで剪定バサミで切りそろえたようにきれいに食べている。こちらでもこんなことは初めて。今はその白菜から菜の花が育っている。やっ
と春が来た～～おしい・塩もみ・菜の花ずし、春を体いっぱいしみ込ませている。

(S.k)



九州の美術館へ

2010年11月と2011年1月、福岡県美術館三か所を訪れました。どちらも松山～小倉フェリーを利用（往復ともpm9:50発am5:00着で2船泊）福岡では、公共交通機関を利用し現地の空気を肌を感じながらの移動を楽しみました。

2010年11月、目的は『モネとジヴェルニーの画家たち』と『ポーランドの至宝 レンブラントと珠玉の王室コレクション』の二か所。北九州市立美術館・本館（北九州市戸畑区）と分館（北九州市小倉北区）で開催されていて西鉄バスと徒歩での移動で巡ることができました。am5:00小倉着。外はまだ真っ暗。7:00迄船中休憩ができるので夜明けまで船内でゆっくりし、徒歩で小倉駅へ（約10分程度）途中の道路は一か所歩道橋の階段はありますが歩く歩道やエスカレーターが設置されて移動は楽でした。小倉駅は新幹線の駅が併設されているせいか新しく立派な建物でした。

美術館開館時間迄にはかなり時間があつたので、コインロッカーへ荷物をいれ身軽になってJR在来線で門司港駅へ。門司港駅は明治3年（1914）に旧門司駅として開業。ネオ・ルネッサンスの様式美が際立つ九州最古の木造駅、全国の駅舎のなかで初の国重要文化財。レトロな待合室は映画のロケにも使用されハイカラな様子がうかがえます。門司港は明治22年（1889）開港、かつての九州の海の玄関口として栄え、今でも往時の華やかな面影を残すレンガ造りの洋館が立ち並び異国情緒満点。ただ、朝早かった為、外観しか見られず残念でしたが、初めての場所だったので結構楽しめました。

小倉へ帰り、路線バスで30分、美術館シャトルバスで北九州市立美術館本館へ。パリの北西、約80kmに位置する村ジヴェルニーはクロード・モネが半生を送り多くの名作を残した地として知られ、この地でモネが追い求めたいくつかのテーマを軸に、モネの作品と「芸術家村」の大半を占めるアメリカの画家たちの作品を通してジヴェルニーの「芸術家村」の全貌に迫る展覧会。

クロード・モネの作品は、<ジヴェルニーのモネ>6点中5点は国内企業所有作品で『積みわら（日没）』だけボストン美術館所有。<睡蓮の連作>5点中3点は国内企業所有作品でボストン・ワズワースアシニウム美術館所有作品が一点ずつ、計11点でした。『睡蓮』は今まで訪れた美術館で色々な角度から描かれた作品を観てきましたが、「ジヴェルニーの冬」を見た時、

寒く乾燥した冬枯れの空気感は伝わるのですが、「これ、モネの絵??？」独特の光が感じられませんでした。「積みわらく日没」前に立つと、絵から放たれる夕刻の光りが自分の顔を照らしているかの様な錯覚に陥る感じがして、立ち去り難く思えた作品でした。ここには、「積みわら習作：秋の日1～12」日の出から日没までの時間を12場面に切りとり描いた作品（ジョン・レスリー・ブレック作）が展示されていましたが、感じるられるものがなく巨匠の一枚の凄さを見せつけられた作品でした。モネ「赤とピンク芥子」これは119.5×37.0縦長の作品で可愛らしさとシンプルさが大好きな作品でした。ミュージアムショップで額に入り実物大のグッズを見つけたのですが、抱えて持ち帰るのは無理とあきらめました。残念!!!

小倉駅まで帰り、駅ビル内で昼食（夫は小倉風とんこつらーめん・私は焼き豚丼、松山でお気に入りのお店があるのですが、どちらも松山の勝ち!）カフェで一息付き、徒歩10分ショッピングモールと文化施設が一体化した「リバーウォーク北九州5F」北九州市立美術館分館へ。

首都ワルシャワのシンボルであるワルシャワ王宮と歴代国王の居城であった旧都クラクフの王宮ヴァヴェル城の全面協力の下、これらの王宮に伝わる絵画、工芸、彫刻などをはじめ、ワルシャワとクラクフの2つの国立美術館のコレクションより19世紀のポーランド絵画を展示。併せてコペルニクス・ショパン・キュリー夫人に関する資料なども展示する展覧会。ここのお目当は“レンブラントのモナリザ”と呼ばれる名画『額縁の中の少女』と『机の前の学者』のレンブラント作品。2点は日本初公開、私たち夫婦にとってはレンブラントの絵画は初めて。薄暗い館内で一際目立っているのかと思いきや、暗い部屋の奥からこちらをじっと見つめている少女が額縁に手を掛け、中から出てきそうで不思議な感じ。まるで、アナログ3D画像のようです。『机の前の学者』の絵も、開いている本が額縁からはみ出ているかのように見えるのです。説明文でくだまし絵の手法が施されている絵画であると書かれていました。素晴らしい絵に感激でした。王宮所蔵の作品らしく、きらびやかでどっしりとした展示物が多く見られました。

二か所の展覧会を楽しみ心豊かな気分になり会場を出ると、もう夕暮れ時。そこには予定外の光景が。辺り一面イルミネーションで飾られていました。



11月5日～1月10日「小倉イルミネーション2012」小倉駅までとぎれる事なく私たちを楽しませてくれ、温かい気持ちで小倉の街を後にしました。

2011年1月、前回と同じフェリーで九州国立博物館『ゴッホ展』へ。ラッキーなことに往復とも八人部屋に私達だけで個室状態でした。ウイークデー（水曜と木曜）だったこともあったのですが、前回は行きは6人・帰りは満室（金曜日だったので移動する人が多かったのかも）でした。観光シーズンとは違い、真冬の寒さの時期だったことも影響していたのかも知れません。が、高速料金引き下げの影響がフェリー業界全般に影を落しているのは承知の事で、フェリーさんふらわあ（大阪南港～大分）の様に松山寄港がこの3月末で往復とも無くなるそうだし、このフェリーもどうなるか分かりません。車に乗らない人にとっては不便な時代がやってきそうな気配を感じ不安です

JR小倉駅からJR鹿児島本線『特急リレーつばめ』でJR博多駅へ。約40分久し振りに本格的な列車での旅気分が味わえました。博多駅から地下鉄で西鉄福岡駅のある天神へ。駅地下ショッピングモールのカフェで朝食を取り、西鉄大牟田線で二十日駅～太宰府へ（通勤ラッシュの人込みに遭遇、都会なんだと感じた一瞬）太宰府天満宮には初めて詣でたのですが、朝早くから合格祈願参拝の人々が訪れていました。

『ゴッホ展』を開催している九州国立博物館は、天満宮の敷地続きにエレベーターと歩く歩道での連絡道があります。9:30開館なので9時前にチケット売り場に行くとテントが張ってありすでに20人程が列を作っています。20分程待っていると、職員風の人と防寒着を着込んだアルバイト風の若者が、パイプを並べ列の道筋作りをし始めました。若者に「来場者凄く多いの？」「寒い中、外で長時間並ばれていますが、今日は待たず入れると思います」と言っていたので、元旦から始まり冬休み・成人の日三連休にはかなり来館したのでしょう。海外の美術館で世界中に散らばっている絵画を観る楽しみ方もありますが、こうしてまとまった作品を日本で楽しめるチャンスに来る事ができ感謝。私がゴッホの絵を観たのは、広島美術館の「ドービニーの庭」だけで、昨年5月展覧会開催を知ってから今日の日を待ち望んでいました。エスカレーターで一気に会場へ。習練の画業わずか10年の間に2000点超の絵を残したゴッホは、ほぼ独学で技法を学び、模写などを通じて唯一無二の表



現を獲得し、彼の情熱と苦悩に満ちた生涯も、作品や主題に反映されています。ここでは、オランダのファン・ゴッホ美術館とクレラー・ミュラー美術館所蔵のゴッホの油彩・版画・素描など日本初公開を含む約70点と、ゴッホが出会い影響を受けたモネ・ロートレック・ゴーギャンの絵画などを加えた、合わせて約120点の作品と資料で構成。ゴッホ芸術の誕生から展開を紹介。キャンパスにたたきつけるような激しい筆致と鮮やかな色彩、感情の高ぶりを現すような静物、風景、肖像画。37歳で命を絶ったゴッホがいかにして「画家ゴッホ」となり得たのか、その道のりをたどっています。尊敬し師と仰いだミレーの版画や素描を数多く模写することにより自らを鍛え、スーラの点描画に影響を受け描くうちに違和感を感じ自分流の手法を見だしゴッホたる画法を確立。1890年終焉の地オーヴェール＝シュル＝オーワーズでは70日間で70枚以上の作品を制作、死の直前まで名作を描き続けた。生前に売れた作品はアルル時代の「赤い葡萄園」一点のみで200フラン。ゴッホの画業を支え続けた弟テオは、悲しみのあまり体調が悪化、尿毒症から精神障害を起こし、ゴッホの死から半年後に亡くなってしまいます。短くも激しかったゴッホの人生に触れ、時代の流れに沿って一堂に展示された作品を鑑賞でき至福の時間が過ごせました。

せっかくなので、常設展示を見て回り、ゴッホ関連グッズを購入し外へ。別棟の美術館レストランでは『ゴッホ展』特別メニューランチが提供されていましたが20分待ちの立て札にあきらめ、朝とは違い賑やかな参道を眺めながら電車で天神まで帰り、昼食を済ませました。博多は初めての地、街中歩きが楽しめるかと思いきや、商店街・百貨店・ショッピングモールとたくさん有り過ぎて疲れてしまい早めに博多から『特急有明』で小倉へ。この間二人共うたた寝ができ小倉に着くと元気が戻っていました。こじんまりとした小倉の繁華街は11月で慣れていたので買い物をし、前回食べた食事処が美味しかったのでそちらでゆっくり夕食を頂きました。駅構内にはベンチ等座る場所が少なく寒いので、暖かく座る場所も多いフェリー乗り場の待ち合い所へ早々移動。往復とも船の揺れも少なく穏やかで快適に旅でした。ところが、松山に着くと、この冬は初の氷点下の朝を迎えていて痛いような寒さ。郊外電車の暖房も効かず足早で帰宅しました。(A・M)

『モネとジヴェルニーの画家たち』岡山県立美術館 ～4月10日迄開催中

『ゴッホ展』名古屋市美術館 ～4月10日迄開催中

『レンブラント光の探求／闇の誘惑』上野・国立西洋美術館3/12～6/12開催

自然の厳しさと共生

椿祭りがすむと伊予路に春が来ると言いますが、ここ数日、酒だる村は大雪で、陸の孤島になりました。バスの運休、水道の破損、雪除けと自然の厳しさに向き合いました。ここの暮らしは、湧水・薪ストーブ・炭と一昔前のスタイルが主ですので、水道の破損が一番困ります。落差で水が来るようになっていきますので、山の中腹までロープを使って登らなければならぬ箇所もあり、バルブを締めれば数回行き帰すると限界になり「神様がもうお山を降りろ」という事なのかなと思ったりしました。でも北国の雪おろしで大勢の人が亡くなった事や、新燃岳の火山灰で苦勞をしている人の事を思うと、これしきの事で弱音をはいてはいけないと考え直して、ストーブに薪をくべていると司馬遼太郎の「我々はマキとして存在している。燃えている状態が命であり生命である。火滅すれば灰に過ぎない」という言葉を思い出し、本当に灰になるまで、細々でも温かく燃えて前向きに生きて行きたいと思いました。桜の花と雪の花と2度見られる幸せに感謝して、好むと好まざるにかかわらず、いづれ去らねばならぬ時が来るまで、奥重信の自然を見守って行きたいと思います。

さて、私の脳の活性化は「くらしの学習会」に参加することです。集まって楽しい会、そしてちょっぴり何かを得たという気持ちがあります。みんなで一つの目標に向かって活動することもあります。時には考え方の違い、年齢の差を超えて語り合えるのがこの会の素晴らしさです。互いの喜びや悲しみに多少なりとも共感することが出来、同じ時を共有することに喜びを感じます。

今、「くらしの学習会」では中央公民館で「蝶のくる庭」の写真展にむけて、頑張っておりますが、蝶やトンボのくる環境は私達を心身共にリフレッシュしてくれます。以前、外国を旅した友人（くらしの会員）から壁掛けをもらいました。

Only when the last tree has died
and the last river been poisoned
and the last fish caught,
will we realize that we cannot eat money

GREE INDIAN 19世紀

「最後の木を切って、最後の川を汚して、最後の魚を捕まえて、我々はお金を食べることができないと知る」という意味で100年以上前にインディアンのクリー族の残した言葉です。今、地球は病んでいます。今まで私達が利便性を追求して得たものと失ったものを計りにかけた時、負の遺産の多さに愕然とします。改めて次世代のために、健康のバロメーターでもあるトンボや蝶が飛び、花の咲きにおう環境を残したい思いでいっぱいです。

平成23年2月記

(S, M)

雑 感

早いもので綾の住人になって4ヶ月余りが過ぎました。寒暖の差の大きな日々が続き、南国宮崎とは思えない吹雪や霜柱に驚かされ、やっと口蹄疫が終息した矢先の鶏インフルエンザの発生に心を痛めました。それでも綾町では口蹄疫も鶏インフルエンザも発生することなく穏やかに時が流れていました。

ところが1月26日夕方、突然、窓がガタガタと音をたてて揺れ始め、慌てて外へ飛び出すと金色の閃光に縁どられた不気味な黒い雲が南西の空を覆っていました。ラジオのニュースで霧島山の新燃岳が中規模の爆発的噴火を起こしたことによる“空振”であると知りました。翌朝、車も家の周りも火山灰で灰白色の世界でした。“黒い雲”ではなく噴煙だったのです。生まれて初めて見る火山灰でした。町の“ほんものセンター”（有機野菜の直売所—綾町は自然生態系農業を推進し有機作物生産機関として認定されています。新規就農者には有機農業の講習会が実施され、各家庭の生ごみも専用容器で週に5回収集され堆肥化されています。）からは野菜が姿を消し、冬の風物詩ともいえる千切り大根干しのネットが畑から消えました。代わって、終日ビニールハウスに積もった火山灰の撤去作業をする姿に事の深刻さを実感しました。洗濯物を外に乾せない日が続きました。2月に入って徐々に野菜が出荷されるようになりましたが、今も露地物は火山灰を洗い流した“わけあり品”として売られています。2月末からは風向きによっては洗濯物を外に乾すことが出来る日が増えましたが、散歩から帰ってきた大五郎の足を洗ったバケツの底には黒い火山灰が溜まっています。

今も新燃岳近くの都城市や高原町では土石流や泥流などの危険な状態が続いています。

1月末に行われる予定だった畔焼きも噴火の影響で2月に延期され、早朝から水路の掃除をした後、消防車が見守る中、綾南川の土手に火が放たれました。ダニをはじめとする害虫駆除の為、欠かせない行事だということです。以前は土手だけでなく田畑すべてが焼かれていたそうですが今はビニールハウスが増えたため危険なので土手だけになったそうです。綾には農耕に関する行事が多く、我が家がある西四枝班でも さのぼり 水神講 春と秋のお彼岸の頃行われる社日講 旧正月の頃と秋の収穫の後の山神講が有り夫々の講守（こもり）という集會を講守宿になった家で行っています。今までに女性だけの集まりである冬の山神講と男性だけの集まりである春の社日講に参加しました。春の社日講は農耕の神様を迎え田植えが始まり、秋は神様を見送る為に始まった集まりとされています。山神講は女性の息抜きと生活全般の情報交換の場の様です。

2月26日から9日間、町内22か所で趣向を凝らした座敷雛が飾られ“綾雛山まつり”が始まりました。綾のひな山は江戸時代に始まり、古来女性は山の神とされ山の神が住む風景を青竹、奇岩、輝石、苔、桃・桜桃などの花木、山野草、綾溪谷に棲息する鳥たちの剥製などで奥座敷に再現し女の子のすこやかな成長と末永く幸せにとの願いが込められています。我が家も2日間かけて22か所全てを拝見させて頂き、おもてなしを受けました。

3月11日 暮らしの学習会主催の『蝶の来る庭』展の初日、東日本で大変なことがおきてしまいました。地震の第一報は、延岡市の延岡城跡公園に藪椿を観に行つた帰りの車のラジオで知りました。最初は、少し前に仙台で地震があつたばかりでしたので、その余震かと思ひながら聞いていましたが、すぐにとつともなく大きな地震が信じられない広範囲でおきたことを知ることになりました。帰宅後のテレビの画面には大津波警報、津波警報、津波注意報が消えることがなく、宮崎港でも1.6メートルの津波が観測され大淀川が逆流しました。東北地方太平洋沖大地震と命名されたこの地震は南北500km東西200kmに及ぶプレートが破壊さえたとされ、地震の規模を表すマグニチュードもM7.9、M8.4、M8.8、M9.0へと修正を重ね、明治以来の観測史上国内最大の地震となつてしまいました。時間が経つにつれ明らかになっていく被害の状況は目を覆うばかりの惨状でした。繰り返し襲ひ掛かってくる最大20メートルを超えたともされる巨大津波に、家が、車が、橋が波に揉まれながら流され、津波の爪痕は凄まじく、原爆資料館で見た原爆投下後焼け野原になつた広島の写真の思い出させました。まるで地獄絵図です。

助かった人も多くは家を始め総てを失ひ、雪の舞う厳しい冷え込みの中、着の身着のまま狭くて寒い避難所暮らしを余儀なくされています。道路が寸断されたうえ、ガソリン不足で思う様に救援物資が届きません。自治体としての機能も失われてしまつていても良い状態の中、ボランティアの受け入れも儘ならない状態が続きました。

役所の資料が流された所もあり、2週間経つた今も人的被害の詳細は判らないと言ひますが、たった一つの命を失つた方が10000人を超え、安否不明の方は20000人近く、避難所暮らしをしている方は250000人を超えと言ひます。孤立避難所も少なくないようすし、孤立避難所としての把握すらされていない所もあるのでは、と言ひられています。

そんな悲惨な状態に更なる追い打ちをかけたのが東京電力福島第一原発の事故です。11日、1号機と2号機で炉心を冷やす緊急炉心冷却システムが動かなくなつてしまひ、12日から15日にかけて1号機から4号機まで爆発や水素爆発が起きてしまひ、原子炉建屋や圧力抑制室が損傷しました。東京電力福島原発の事故は、18日、経済産業省原子力安全・保安院は福島第一原発の1~3号機の暫定評価を「レベル5（米スリーマイル島事故相当）」と発表しましたが、放出された放射能の推定量からみて、国際評価尺度で大事故にあたる「レベル6」に相当する規模になる可能性が高いとされています。現場では、日夜過酷な状況下で自衛隊、東京消防庁ハイパーレスキュー隊、東電や関連企業の社員が冷却と封じ込めの為の必死の作業を続けていますが原発は損壊の連鎖の中にあるとしか言えない状況が続いています。原発から半径20km以内の住民には避難指示が、20km~30kmの住民は屋内退避が続く中、近隣各県の野菜や水道水から基準を超える放射性物質が検出されるに至りました。

緊急事態と言ふことで、作業中の被曝線量の上限も100ミリシーベルトから250シーベルトに引き上げられた矢先、3号機で浸水したタービン建屋で作業中の作業員3人が被曝、β線熱傷の疑いで病院に運ばれました。

原発さえ無ければ、この人手と車輛やガソリンを被災地の人達に届けることが出来るのに！もっと迅速に復興支援が出来るのに！と思うと悔しくてなりません。

どうしても避ける事の出来ない自然災害の脅威は測り知れないものです。自然の前には人間は本当に小さな存在です。今回の原発事故はその自然の驚異を想定できると思い上がり、まやかしの原発安全神話を信じ込ませ、推進した人達による人災としか思えません。2007年の新潟県中越沖地震の際の柏崎刈羽原発にも学ぶチャンスは有ったのです。学ばなかったばかりでなく今回の事故後の 経産省原子力安全・保安院、東京電力の会見は 想定を超えた 現時点では特定できない 基準値は超えているが直ちに被害が出るとは認識していない の繰り返しと徒に専門的な値と単位の羅列で誤魔化されているような気持ちにさえなってしまう。

原発は怪物の様な存在です。手懐けることなど至難の業です。

今回の事故がチェルノブイリ事故のような最悪の事態に至らずに終息できた時にはその幸運を感謝し、原発依存から離脱すべきです。

夜も昼のように明るく、外気温度に拘わらず室内はいつも快適な温度を保つ、そんな生活を当たり前としている私達にも責任が有ります。夜は暗く、夏は暑く、冬は寒いのが自然なのです。

先ず、個人は節電を心がけ、電力会社には余剰電力の蓄電が可能になる為の研究、開発こそを切望します。

いつも心から離れない言葉が有ります。

一つは“くらしの手帳”に毎回連載されている聖路加国際病院小児科の細川亮太医師が48号で引用されていた「ニーバーの祈り」。

“神よ 変えられないものを受け入れる心の静けさと
変えられるものを変える勇気と
その両者を見分ける英知をお与えください”

二つ目は1月下旬 NHK ラジオのビジネス展望で同志社大学大学院ビジネス研究科教授 浜矩子氏が紹介されたフランスの戯曲（だったと思うのですが）からの一文。

“私達は今どこに居るのか
どこへ行きたいのか
どうやって行こうとしているのか
地図は持っているのか”

最後に 今回の震災で命を奪われた方々の無念の思いを心から悼みご冥福をお祈りし、大変な思いをされながらも助かった方々に、助かって良かったと心から思っ頂ける様な復興と支援が出来ることを願っています。 (K.O.)

C0₂削減益で食育推進

給食センター バイオ燃料利用

東温市

2011年2月23日(水) 午後新聞

事業は環境省のオフセット・クレジット（J-V E R）制度を活用した取り組みで、市内でのエネルギー循環を目指す東温市の「環（わ）のまちづくりに」プロジェクトの一環。市市民環境課によ

東温市は、市学校給食センター（同市南方）がバイオディーゼル燃料（B D F）使用を通じて削減した二酸化炭素（C O₂）をクレジット化して企業に売却し、食育事業や地産産給食推進のための財源とする独自の地球温暖化対策に着手することを決め、22日発表の2011年度当初予算案に關係事業費65万円を盛り込んだ。

J-V E R活用

四月例会のお知らせ

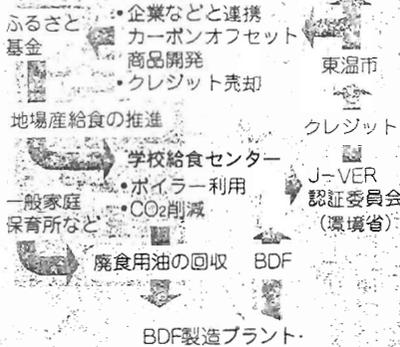
四月四日（月）午後二時から 林さん宅

元緑化センター所長 中村秋紀氏を囲んで

ンターのボイラーなどで燃料に利用している。J-V E R制度は削減したC O₂について環境省の認証に基づき、その価値を企業と取引

東温市の学校給食センター B D F 利用プロジェクト

オフセットイベント



東温市によると、企業との売買は1ト平均4千〜5千円程度を想定。売却益は減農薬などの地元産農作物を市内給食に利用したり、食育事業を推進したりする費用として活用する予定。市民環境課は「センターを中心にエネルギーの循環ができる仕組みで、地産地消率向上にもつながる。さらにサイクルを発展させ、市内の資源循環農業のモデルも確立させたい」としている。今後はクレジットの売却先やオフセット商品開発の連携企業などを市内外から募る予定。（伊藤絵美）

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000 円/年 購読会員 1,000 円/年

振込先口座番号（郵便局） くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail: kt-hayashi@nifty.com